

六月十二日(土)午前十時より大般若法要。先住忌(前住廿六世 雲巖見龍大和尚十三回忌)は午前十一時よりとり行われます。

蔵王山安善寺

◆編集・発行人◆
近藤龍弘

〒940-0052
長岡市神田町1丁目4番地10
TEL.(0258) 32-2811

◆スタッフ◆
安藤一夫

小林国二 小林善秋 高橋潔
佐藤正樹 近藤マリ子 近藤善信

和致芳

坐祐の銘

朝はお早よう御座います/夜はお休みなさいませ/頂きますにご馳走さま/御出かけお帰り御挨拶/
 取はお休みなさいませ
 頂きますに御馳走さま
 御出かけお帰り御挨拶
 誰かに会ったたり今日は
 別れる時は左ようなら/失敗したら済みません
 失敗したり済みません
 労(いたわ)る言葉は御苦勞さん
 御決の言葉はみぢ箱子
 愛の言葉は花が咲く

安善廿六葉歌



坐祐の銘 朝はお早よう御座います/夜はお休みなさいませ/頂きますにご馳走さま/御出かけお帰り御挨拶/
誰かに会ったたり今日は/別れる時は左ようなら/失敗したら済みません/労(いたわ)る言葉は御苦勞さん/御
禮の言葉は有難ふ/愛の言葉に花が咲く 安善廿六葉龍

先住の遺訓「坐右の銘」

翠巖龍弘



今年、前住廿六世雲巖見龍大和尚の十三回忌を迎えます。明治三十五年生まれの師匠は、十才の時小僧として当寺に入り、身体で仏法を学び、自分に厳しく、他

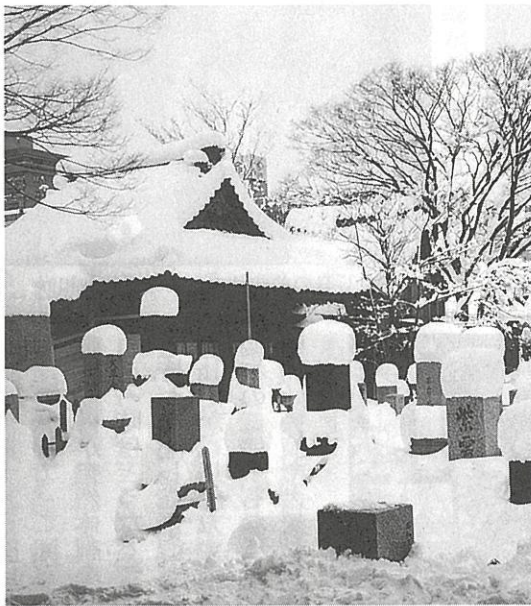
人にはこの上なく親切で多くの人から親しまれました。遷化されたあと、書齋を整理している私の目に、机の前に貼ってある一枚の紙が目にとまりました。それをもとに引き伸ばし、のれんにしたものが上の写真です。師匠が自ら墨書きされた「坐右の銘」(修行中の人が折に触れて思い出し、自分を励まし戒めとする言葉)です。書かれた言葉は決して難しいものではなく、日常生活

で必要な言葉なのですが、最近忘れてきている人が多いようです。

昔から「人生死ぬまで勉強だ、坊さんは一生修行だ」などと言われているが、頭では理解していても行動に起こすことは難しい。私などは、ついつい安易に流されてしまう。その反面、師匠は八十六才という年齢に甘んずることなく、最後まで修行中であつたように思われます。そのことが与えられた寿命を燃焼しきり、亡くなる寸前まで周りの人々を感化し続けたのではないのでしょうか。仏教とは決して難しいものではなく、特別な人達のものでもありません。人間がみな幸福に人生を全うできるよう、教えられているのではないのでしょうか。そのためには何が必要か、それは坐右の銘のごとく「当たり前のことを当たり前にやる」ということが大事なことと思えます。

四苦八苦①生苦…生まれることは苦である。

「四苦」プラス「四苦」「四苦八苦」



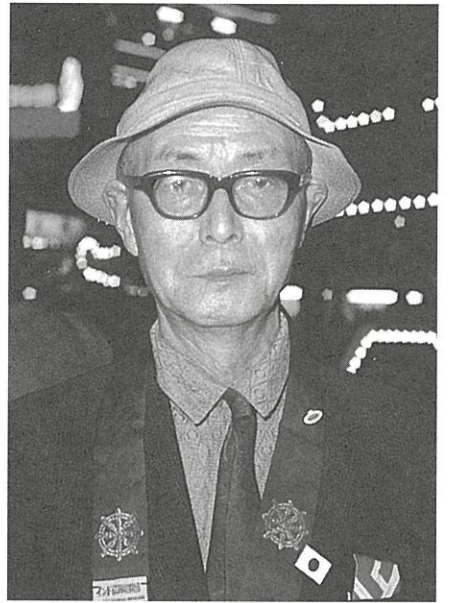
今年はお墓も大雪でした。ご先祖様も驚いたでしょう。

今年のご先代見龍方丈様の十三回忌に当たるとのことですが、月日の経つのが余りにも早く、光陰矢の如しの譬えを実感いたしました。お祈りします。

長岡市の中心部で、米軍の空襲を免れた数少ない寺の一つである安善寺様に、長岡市仏教会の事務所が設けられたのは戦後間もない頃

ように会議が行われました。どんなに会議の終わりが遅くなっても、見龍方丈様も奥様も気持ちよく会場を貸してくださいました。

長岡市の花祭りは古い歴史と伝統を持つており、戦後もまだバラック住宅の多い時分から花祭り行事が復活いたしておりました。というのも、仏教会の事務



在りし日の前任廿六世雲巖見龍大和尚

見龍方丈様を偲んで

徳聖寺 中村啓識



徳聖寺 中村啓識

でありました。記憶は定かではありませんが、昭和二十二年あたりから、仏教会では毎年二月半ばになると、花祭りの準備のため、お庫裡で毎晩の

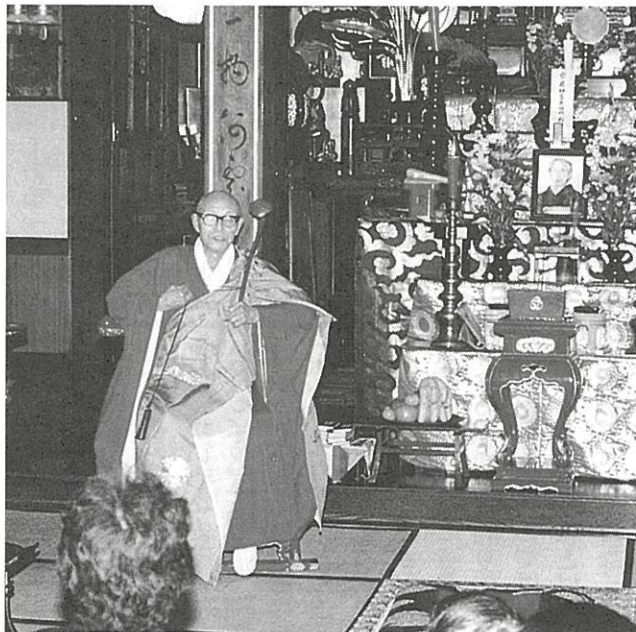
所が安善寺様に置かれていたおかげであると思えます。安善寺様からお練りの行列が出発して、神田通りから関東町スズラン通りを経て、焼け残った昔の公会堂を花祭り式典会場に、盛大な花祭りが毎年執り行われました。昭和五十年代半ば頃までの長い歲月、その花祭り行列は長岡の春の名物でありました。兎に角その盛大な花祭り執行の蔭には

見龍方丈様始め、山内の皆様の言うに言われぬご尽力があつたればこそと深く感謝いたしております。私は、見龍方丈様が仏教会長であられた昭和三十六年に仏教会の事務担当を仰せつけられ、それ以降ずっと昭和五十二年までの十六年間、仏教会の事務局の仕事をさせていただきました。昭和四十年頃から仏教会長は井上憲司様に替わりまし

たが、事務所はずっと安善寺様に置かれておりました。私はほとんど毎日のように事ある毎に安善寺様に通わせていただき、見龍方丈様から種々細かにご指導をいただきました。昭和四十八年二月、長岡市仏教会と鎌倉円覚寺の佛心会と合同で、インド仏蹟巡拝旅行を実施いたしました。カルカッタからベナレス、更にアグラからニュー

デリーへと十五日間に及ぶ長期の旅行で、ご同室の齋藤廸信様が突然体調を崩され、一時はどうなることかと皆が心配した事態もありましたが、見龍方丈様はお疲れのご様子もなく、旅行中終始笑顔で大変お元気に

には、進んでご参加になり、ご高齢にも拘わらずお元気で、むしろ若輩の私達を励ましてくださいました。戦後の長岡市仏教会にとって、見龍方丈様はいろいろとご尽力の上に仏教会の今日の基礎を築かれ、大変



過ごしておられました。また、昭和五十七年二月、ミャンマーのヤンゴンから北上して、バガン、マンダレーと、旧ビルマの仏教遺跡巡拝旅行を仏教会と檀信徒会とで実施いたしました際

なご功績を残されたお方でありました。ご立派な現方丈龍弘様によって、安善寺様は益々ご隆盛間違ひなく、更なるご繁栄とご活躍をご期待申し上げます。

四苦八苦②老苦…老いることは苦である。

「苦」とは「苦しみ」ではなく、「思うがままにならないこと」の意味。

先住様のご人徳

東京都杉並区●本間 育子

人揃ってお見えになり、若い現方丈様の読経に合わせ、風格のある先住様の読経のお声が我が家に広がって、何か安善寺様の本堂でお経をあげていただいているような気持ちになったのを思い出します。

私どもが『翁あられ』が大好物なのをご存知の先住様は、お墓に参つている間に工場が近いからと買ってきてくださる、心やさしい気さくなお方でした。

とかくお寺は在家の者にとつて近づきにくい、縁遠い所でございますが、先住様のご人徳でしょうか、お部屋はいつも檀家の方々の出入りが多く、お慕いする方の多さ

我が家は市内今朝白町の出身です。先祖から安善寺様にお世話になっております。現在、身内は誰も住んでおりませんので、長岡に墓参りに年一〜二回訪れる有様です。毎年、お盆には東京までおいでくださいませ、駅から十分ほどの我が家まで汗をふきふきおみえになり、私共も田舎から父親が来てくれたという思いでお迎えしたものでした。

現方丈様も学生時代、お二



見龍和尚様の穏やかな表情

総代●太刀川進之介

菩提寺の安善寺様へは子供の頃から参詣だけはしていたものの、関わりはすべて両親に任せっぱなしの私でしたが、父の葬儀に始まり、毎月のお経、年法要とにわかに前住様のお世話になり、お会いしてお話をする機会が多くなりました。

前住様の穏やかな表情と分かりやすいお説教は、単に家長の勤めとしての法要を覚え、前住様への尊敬の念と、仏の道を希求したい思いへと徐々に変わってくださいました。

現在、安善寺様の総代を

に、東京から伺ってびっくりしたことを思い出します。私どもも、墓参りに行き先住様ご夫妻にお目にかか

ることは、親の家に帰ったような気持ちにさせていただくことができました。この思いは、現方丈様に引き継がれ、安善寺様に何うとホツといたします。

先住様がご病気になるられたことを知らずにおりましたのは、誠に申し訳なく、今も悔やまれてなりません。今は、みな思い出ととなってしまいました。いつまでも安善寺様を見守ってくださいることでしょう。私共も先住様のお諭しをことあるごと

ました。さらに、ご退薫記念として檀家の方々に直筆で五百枚余りの色紙を一枚ずつ書き上げられたご奇特なお心にも感謝いたしました。ご引退後の見龍様は、東堂様として、現、龍弘和尚様をサポートされる傍ら、私共にもいままでと同様気さくにお付き合いを賜りました。



ものです。

例えば、見龍和尚様(前住様の退薫式は、誠に荘厳で厳肅、その折りには住職としての最後の御血脈を授与してくださることになり、私も妻も一緒に受けさせていただきました。洗心の思いや緊張感、感動を味わい

いつもご壮健でおられるとお見受けしていたのですが、突然のご入院に引き続いて、間もなくのご他界には驚きました。八十六歳の天寿を全うされたとは申せ、米寿のお祝いができなかったことは、心残りの思い出となつております。

四苦八苦③病苦…病むことは苦である。

“思うがままにならないものは、思うがままにしようとするな”

きょうくまわ 教区廻り開山忌と

かいさんき 教区護持会に出席して

笠井義一

私共の安善寺は、新潟県第一宗務所の第五教区に属していますが、毎年二度の「教区護持会」(各寺院の住職と檀信徒の代表が参加しての教区全体の護持会)と、年に一度「教区廻り開山忌」(大本山永平寺)開山・道元禪師(高祖承陽大師)、大本山總持寺(開山・螢山禪師(太祖常済大師)両禪師のご命日を両祖忌と申し上げ、全国各教区毎に教区内寺院を交代で一同に会し、報恩法要をお勤めする)が行われております。私は昨年十月十九日に悠久山の堅正寺様で行われた、教区護持会・廻り開山忌に縁あって出席させていただきますました。

教区護持会では、突然議長を命ぜられ、議事の進行を勤めさせていただきましたが、教区護持会長の挨拶の後、九月三日〜四日に約三

百人が参加しての「管区集会」(北陸五県の各教区長と教区護持会長が出席しての集会)報告として、人権学習のあと、①住職不在の寺院の今後の問題について。

あり、坐禅、朝課、法話など、素晴らしい経験であった由。その後、質疑応答があり、会議は終了いたしました。引き続き、教区廻り開山忌が厳修されましたが、堅



②自然破壊に対する、宗門の取り組み方について、などの討論内容の説明。二、本山研修報告として、第五教区で四十三名の参加が

正寺方丈様導師のもと、二十名くらいの寺院の方々のマイクを使わない地声での読経の荘厳さは素晴らしいものでした。

人生 雑記 追慕

佐藤 正樹



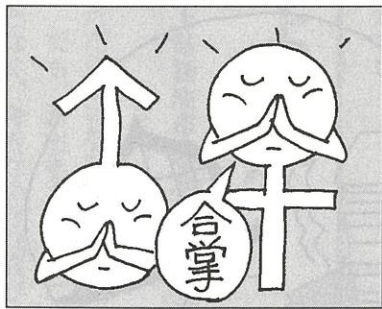
光陰矢の如し、などと申しますが、安善寺廿七世靈巖見龍大和尚も、本年が正当十三回忌の年にあたるそうです。

前任方丈様にお仕えたのが約七年間くらいだったと思います。その間、いろいろなことがありました。今思い出してみますと、まだ生意気盛りで若輩者の私に、

法要後、特派布教師より、禪師様の考え方、即ち、宗門の考え方について事例を交えての法話があり、時間オーバーしたのも気づかぬほど素晴らしいものでした。私もよい経験をさせていただきました。

いろいろなアドバイス、励ましのお言葉などを頂き、懐かしさと感謝の念で胸がつまりる思いでいっぱいであり

ます。日々の行持は綿密で、何事も自らが率先しておやり



になる御姿を思い出すにつけ、現在の自分の姿に照らし合わせてみますと、恥じるばかりです。

晩年、よく御法事の席などで好んでお話になられた御法話の中で、今でもよく思い出されるお話があります。それは、前任方丈様がある時、タイのバンコクに仏

跡巡拝の旅にお出かけになられた際、ひとつの疑問をお持ちになられたそうです。それは、何処のトイレに行かれても、男子トイレの前には男姿の、女子トイレの前には女姿の合掌した男女の姿が描かれている。何故なんだろうか？

前任方丈様ご自身が年を取られて気がつかれたそうです。若いうち、あるいは健康なときは、排便排尿は当たり前。それが、年を取ったり、病気により、意のままにいかなくなるのが起きてしまう。普段あたり前に思っている日常の生活に支障を来すことがある。

あのとき目にした男女合掌の姿は、健康でいる今の自分の姿に感謝の気持ちを感じずに生きていきなさいよ。健康なときはそのことに気づかない人が多いのではないかと。健康な生活をしている人ほどいまの自分の健康に感謝して生きなさいよ、と。人間、未来永劫健康ということはありえませんが、前任方丈様の遺訓を胸に、日々過ごしていきたいものです。

四苦八苦④死苦…死ぬことは苦である。思うがままにしようとするから、「苦」が発生する

涅槃会はお釈迦様入滅の日、お彼岸は先祖供養と心の修養週間

涅槃会 (団子まき)

涅槃会は、二月十五日釈尊(お釈迦様)が、クシナガラ城外、沙羅樹の園で入滅された日に行う法会(安善寺では三月十五日に厳修)で、常楽会・涅槃忌・仏忌ともいわれております。涅槃とは、古代インドの「ニルヴァーナ」という言葉の音写で、「迷いの火を吹き消した状態」を意味します。執着や欲望の火が吹き消され、迷いのなくなった境地をさします。「火」とは、「生命の火」と考えることもでき、釈尊の入滅をさすことばとしても用いられます。

釈尊の死は「完全な涅槃」という意味で「大般涅槃」とも呼ばれています。

法会では、涅槃像がかかげられ、「遺教経」が読まれますが、詳しくは「仏垂般



涅槃略説教戒経」と申し、一般には「遺経」といわれております。釈尊ご入滅の光景から、最後のご説法が記されております。

涅槃のおわりに「別離を悲しんではならない、生まれたいものは必ず滅し、会うものは別れることは必定である。しかし遺せし教えのあるところ、わが法身は常住にして不滅である。済度すべきものはみな済度したし、まだ済度せぬもののために、あとで救われる因縁をつくった。みなもの、一心に正しい教えを依りどころにして精進しなさい」と説かれております。

さるものです。

彼岸会

種を時く日かな

彼岸会とは、春分と秋分の当日(彼岸の中日)をはきんで、前後各三日の七日間に行われる法会です。寺院では説経や法話の仏事が行じられ、信者はお寺に参詣や墓参をいたします。その起源は古く、聖徳太子のころともいわれています。日本独特の行事といわれており、盂蘭盆会とともに最も民衆化されて、国民生活の中にとけこんだ仏教行事であります。

「彼岸」とは「此岸」に対する言葉で、此岸は苦しみに満ちたこの世で、彼岸は理想の世界をいいます。迷いの此岸に対し、さとり世界、ニルヴァーナ、究極の境地、無為の岸です。

此岸にいる私共は、お彼岸の七日間をご先祖様に感謝報恩の供養をすると同時に、修養週間として、仏道に励んで彼岸に渡る努力をする日々でもあります。

お彼岸の中日を仏教の基

本原理である「中道」になぞらえ、大乘仏教の修行徳目である「六波羅蜜(六度ともいう)を実践することです。「波羅蜜」とは、古代インドの「パーラーミター」という言葉の音写で、パーラーミタとは「到彼岸(彼岸に渡る)」という意味です。六波羅蜜とは次の六つを実践することです。

- ①布施…施しをすること
 - ②自戒…戒律を守ること
 - ③忍辱…他人から受ける迷惑などに耐え忍び、怒りにとらわれないこと
 - ④精進…正しい努力(中道の努力)をすること
 - ⑤禪定…心を落ち着けること
 - ⑥智慧…仏の智慧を得ること
- と。真実を見る目を持つこと
- お彼岸の期間は、日常の苦しい生活を脱し、楽しい精神生活を送るために、仏法を聞き、行いを正しくする、仏道精進の日々としたものです。

春の行事

皆さま、おそろいでご参加ください。

- 涅槃会 (お釈迦様が亡くなった日)
3月15日(月) 午前十一時〜
読経法話 お斎・団子まき
法話 当寺住職
- 彼岸会 (先祖供養の日)
法要 各日とも午後一時〜
3月18日(木) 彼岸入り
法話 大日寺住職 佐藤正樹師
3月21日(日) 彼岸中日
法話 当寺住職 近藤龍弘
3月24日(水) 彼岸明け
法話 大日寺住職 佐藤正樹師
- 花まつり (お釈迦様の誕生日)
5月5日(水) 子供の日
催し/稚児お育て法要・甘茶接待
- 大般若法要 (檀信徒の家庭繁栄と安全・平和祈願の日)
大般若法要
6月12日(土) 午前十時〜
先住忌 (前任十三回忌)
午前十一時〜
説教 海津良彦老師

冬の名残を熱い椀もので...

近藤マリ子

昨年一月、安藤編集長のひと声で始まりました季刊紙も早一年。五回目の発刊となりました。

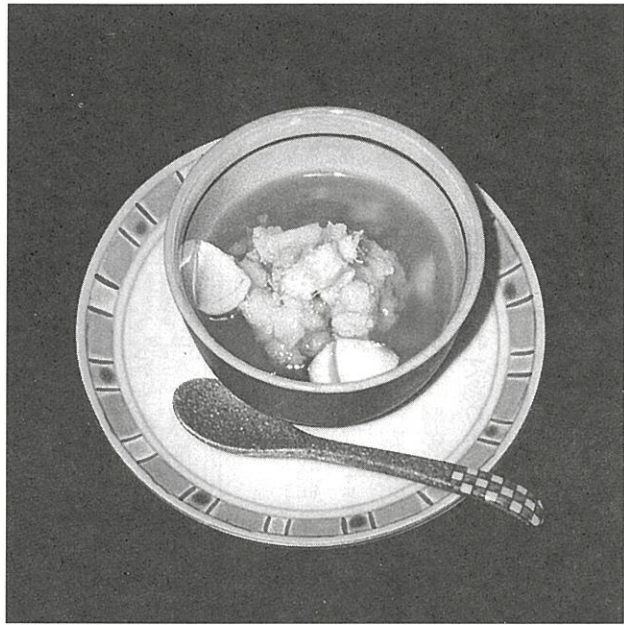
プロ顔負けの段取りに無我夢中でただついて来ただけですが、これからの寺に課せられたニーズの大なることをづくづくと感じさせら

れた一年でした。

今回は、雪深い長岡で春を捨うのはまだまだ難しいので過ぎゆく冬を惜しみながらある材料で作ってみました。

蓮根蒸

①蓮根は皮をむき、あく抜



きをして、すりおろし水分を切っておきます。

②麩は、水にもどして少し濃い目に煮含め、煮汁を絞って一センチくらいに切っておきます。

③蒸し椀に蓮根、麩と交互に二回程重ね、あればゆでておいた百合根、銀杏を加え、蓋をして十〜十五分蒸します。

④葛あんは、だし汁カツプー、酒、味醂、薄口しょう

ゆ各大さじ一を煮立て、片栗粉中さじ一を同量の水で溶いたものを加えて、火を止めます。葛あんをかけ、おろし生姜を加えて熱いうちにいただきます。

材料(二人分)

蓮根中一節、麩中二枚、生姜、百合根、銀杏

とても簡単でおいしいお料理です。ぜひ作ってみてください。

長岡の春はいかがでしようか

埼玉県新座市●北野芳子

花のみ

待つらむ人に山里の

雪間の草の

春を見せばや

藤原 家隆

バブルという大輪の花が散って久しくなりました。

華やかなものに憧れ、足元を見ることを忘れて過ごした日々。大なり小なり、経験した、また、経験しつつあるその落差の大きさに



ただ戸惑いながら送る日々。でも、希望をうしなうことなく、身近な小さな喜びを見つけて行きたいと思っております。

千利休の愛誦の歌と云い伝えられるこの歌が、心に沁みるこの頃でございます。

梅のつぼみもふくらみ、木々の枝先にはもう春の息吹が感じられます。

御地の春はいかがでしようか。

お別れ

(平成十年十二月末〜十一年二月末)

若林恒子様 十二月廿九日寂

三条市南四日町

吉田精次郎様 十二月廿九日寂

東京都足立区

五十嵐サキ様 一月二日寂

東京都武蔵村山市

鈴木ハツ様 一月七日寂

長岡市西神田

丸山美枝子様 一月十六日寂

長岡市東神田

目黒幸様 一月二十五日寂

長岡市松葉

品田タマ様 二月九日寂

長岡市神田町

廣江稔様 二月十二日寂

長岡市中島

片桐ミチ様 二月十四日寂

長岡市小曾根

寒川武司様 二月廿二日寂

東京都日野市

四苦八苦⑥怨憎会苦(おんぞうえく)…怨み憎む者に会わねばならぬものは苦である。

「あきらめ」は「断念」ではない。「諦め」とは「明らかに極める」こと。物事を明きらかにし、その本質を究めること。



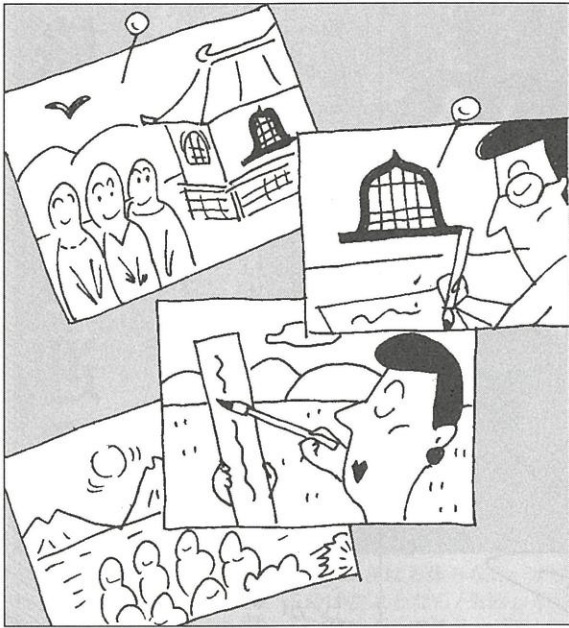
なごしやか写経会

金子 テル

連日降り続く二月の雪に狭庭の南天の葉先から、ぼとりと雫が音を立て、嗚呼春がすぐそこまで思つと、四月から、また写経の方々とお逢いして、本堂での静寂の刻に出逢えると思ひ、何となく家事をする動作もはずむ近頃です。

長い間、心にかかりながらも、なかなか飛び込めなかつた写経会に入会させていただき、幾年経ったのでしょう。

とかく在職中は多忙にかこつけて一歩踏み出せなかつたのに、ふとした機会に、お友達と連れだつて入会させていただき、方丈様ご夫妻をはじめ、人生の大先輩や、ぐつとお若い方々と本堂で一心に筆を運ぶ静寂の刻が何とも心に安らぎを与えてくれ、時には寺の猫ちゃんが皆様の周りを訪問してくれたりする、寺ならではの写



経会に出逢えた喜びは、今でも新たなものがあります。写経後、本堂で読経を唱和し、その後の茶話会は、もう皆様百年の知己と同様、仏世界から一般世相、家庭雑学と諸々の御発言を聞き、頭が一辺に開花したような充実感で、足取り軽く帰路に着かれます。

今までに何回も旅行に参

加させていただき、他では味わえない親近感での旅は、楽しい各地の想い出のファイルを残しており、こんな様を喜んでるのは、ご先祖の方々ではないかと思ひ、今年もまた、この雰囲気に多くの方々と浸り、革細工、俳句の方と一緒の忘年会まで、会員の皆様と過ごせることを念じております。

龍弘流 読者とのQ&A

Q 布施とは何ですか？ また、布施もいろいろあると聞いておりますが、どんな布施があるのでしょうか？

A 布施とは、与えること・ほごし・喜捨など、金や品物を与えるばかりでなく、親切な行いも布施であります。財物を施すことの財施・法を説いたり、いつくしみをもつことの法施・おそれなきことを施す、人を恐怖から救うことの無畏施の三種があります。

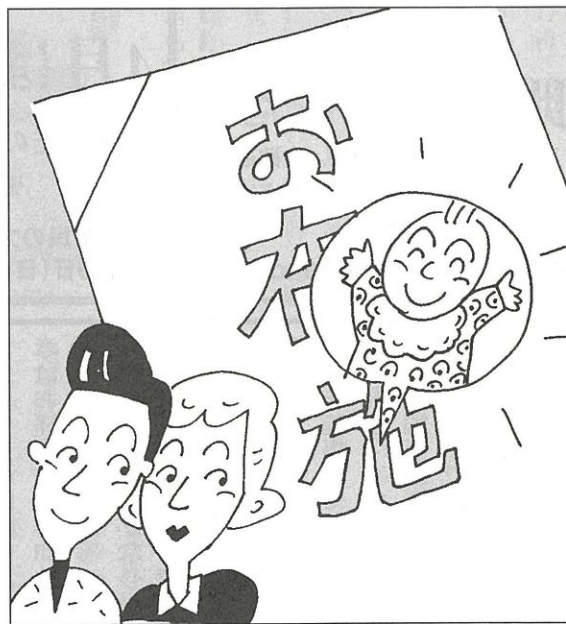
しかし、同時に三つのものが浄らかでないと、真の布施にならないといわれており、それは三輪清浄(空寂)の布施といわれ、施者・受者・施物の三輪が清浄であり、空寂となっていないければならないとされております。

布施は施すべき財物や教法をもつていなくても、親切な心がけや、行為として

の、心施・身施などによつても行うことができます。『雑宝藏経』に、財物を損することなく、七種の施しがあると説かれております。

(1) 眼施：誰にでも好意の眼を向けること。

(6) 床座施：親切に座席をゆずること。
(7) 房舎施：宿を貸し、自由に休息宿泊させること。
赤ん坊は、いつもにこにこ笑っていますが、その笑顔が両親の疲れを癒してく



(2) 和顔悦色施：いつもにこにこした顔付きをもって人に接すること。
(3) 言辞施：柔和でやさしい言葉をもって人に接すること。
(4) 身施：身体で他に奉仕し、親切にすること。
(5) 心施：善心和善のまごころをもって人に接し、深く供養奉仕の心をもつこと。

れ、大人の心を和やかにしてくれまふ。それは仏さまが、赤ん坊には布施する財産がないからと与えられた「笑顔」という布施ではないでしょうか。

布施とは気持ちさえあれば誰にでもできることで、菩薩行そのものでもありません。

四苦八苦⑦求不得苦(ぐふとく)…求めるものが得られぬのは苦である。

思うがままにならないことを、思うがままにならないことだと“明きらめる”。

我が子の旅立ちを迎えて

箕輪 浩

早いもので、新しい年を迎えて二ヶ月が過ぎ、今年もまた、旅立ちの季節が来ようとしています。「進学・就職」いま、新たに旅立ちとして居る我が子を持つておられるご両親は、さぞ期待と不安に心を踊らせておられることと思います。

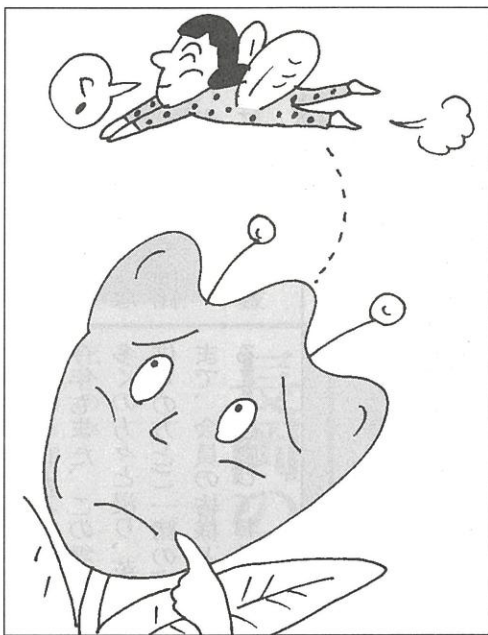
実は、我が娘もこの春から進学し、東京へと旅立つて行くため、正に私がこの心境なのです。特に、昨今は物騒な世の中であり、毎日の新聞報道に驚かされ、心配しております。

自分が手塩にかけて育てた我が子が、今試されようとしているのです。自分の教えが正しかったのだろうか？ 正しく理解しているのだろうか？ 一瞬の不安のだろうか？

「可愛い子には旅をさせろ」といふ言い伝えがありますが、なるほど真意はわか

ります。しかし、これは本当に勇気のいることです。我が娘も一人暮らしを始め

あり余る昨今、改めて心の時代が叫ばれておりますが、物が豊かになった分、心が



人間は一人では生きていけないことを知り、同時に親のありがたさを知ること

貧しくなったのではないでしょう。確かに日本の高度成長のために一心不乱に

ことが分かる人間であつてほしいと願っております。しかし、これもみな、今までの育て方、教えがどうであつたかによる結果です。

何でも便利になり、物が

働いてきた人々にとっては、我が子の教育などには目を向ける余裕すらなかったのでしょう。いわば、物が豊かになった代償とも言えるのです。そんなことを考えると、今我々がなすべきこと、しなければならぬことは何か、と考えさせられます。

物の豊かさに負けない心の豊かな人間を育てて行くことが、今生かされて居る我々の使命ではないでしょうか？

自分自身を初め、我が子、そして、その人を取り巻く人々全員が、思いやりと良識を持った心豊かな人間であるならば、我が子の旅立ちに何の不安も感ずることはないでしょう。そして、誰もが困っている人々に自然と手を差し伸べられる社会にできたら、と思う今日このごろです。

稿迎 投歓

皆さまの楽しいお話や身近なお話、ご質問・ご相談、ご意見をお寄せください。お手紙・ファックス・Eメールのいずれでも結構です。お待ちいたしております。

〒9400052
長岡市神田一四一十
安善寺 近藤龍弘
FAX 0258-32-2870
Eメールアドレス
vc2r-kndu@asahi-net.or.jp

4月は統一地方選挙

あなたの大切な一票です。棄権せず必ず投票しましょう！

長岡市民の方は、4月11日(日) 県議会議員選挙
4月25日(日) 市議会議員選挙です。

編集 雑感

編集員は大変な仕事をせねばならない。レイアウト校正等々。中でも一番大変なのは任職の執筆である。量といい内容といい、毎回感服するものである。後の者は紙面が少なく交替で書けばよいので心配はいらないが、書く内容のネタ探しには苦労する。

ユニークな佐藤さんの文章はお経を読むが如く、軽やかな心持ちとなる。才筆のない小生にはかなり厳しい修行のようなもので、頭を痛める一つとなった。

しかし、救いはある。なんといつても住職奥様の内助の功を編集員で味わえることである。手づくりの持てなしを編集会議の名でお受けすることである。最高の般若湯と紙面で紹介している通りの料理。まさに煩惱即菩薩となるゆえんかと一人で納得している。

何はともあれ、「継続は力なり」であるので、読者の皆様にご助力を賜りたい。ぜひ、小生たちを救わんと思う方、投稿というお布施をお願いしたい。(小林国二)

四苦八苦⑧五陰盛苦(ごおんじょうく)…肉体と精神がおしなべて苦である。

災難に遭う時節には、災難にあうがよくなる候。死ぬ時節には、死ぬがよくなる候。これは災難を逃るの妙法にて候(良寛)

第6号、夏号は平成十一年七月五日(月)発刊予定です。